様式 5-1:終了時活動報告書

2025年11月20日

世界の人びとのためのＪＩＣＡ基金活用事業
終了時活動報告書（2024 年度採択案件）

１．業務の概要	
（１）案件名	「ジンバブエにおける女性音楽教師育成を通じた女性の地位・収入向上を目指すプロジェクト」
（２）実施団体名	特定非営利活動法人しまなみアートファーム
（３）実施期間	2024 年 11 月 1 日～2025 年 10 月 31 日
（４）実施国	ジンバブエ
（５）活動地域	ハラレ、*[1]グウェル、*[2]チェグツ *[1]ＭＳＵ（国立大学）での教育活動は実施しないが、関係性は継続する。 *[2]今後の協力可能性を探るため、他ＮＧＯ団体の建設するセンターへの視察を行う。

（６）活動概要

①活動の背景：

〈背景〉

ジンバブエ社会において、音楽は非常に重要な位置づけであり、厳しい政治・経済状況の中、音楽をすることで夢や希望を持とうとする傾向が強い。ジンバブエでは、2021 年より小学校指導要綱で音楽の授業が必須となっており、国策として「音楽」が重要な位置づけになっている。しかしながら、小学校での音楽指導が必要となっているものの、楽器がなく、指導者を育成できる人材も限られていることから音楽教師が不足している。また、ジンバブエでは女性の社会的地位が低く、女性が経済的に自立しづらい環境にある。そのため、人口の 48%を占めている子供に質の高い教育の機会を提供できる女性教師を育成し、音楽で女性が自立して収入を得る機会を創ること、社会的な地位を向上させることは重要である。

現在、小学校の非常勤教員として働きながら、大学で教員免許取得を目指す女子学生も多いが、非常勤教員から本採用になるのは難しい。楽器の演奏指導ができるなど特別な技術を持つことで本採用につながりやすくなる。一方で、日本では小学校で鍵盤ハーモニカを購入する小学生が多いが、小学校卒業とともに不要となり廃棄されている。鍵盤ハーモニカは、持ち運びができ電気を必要とせず、壊れにくく、西洋音楽の導入として、ジンバブエの環境に適した楽器である。研修生一人に一台ずつ配布できるだけの数を日本で集めることができる。以上のことから、日本で使われなくなった楽器が、ジンバブエで音楽教師を目指す女性のエンパワメントに活用され、女性の地位や収入の向上へ繋げられる活動をジンバブエで実施することとした。

〈経緯〉

ジンバブエ人著名音楽家で社会活動家である Edith WeUtonga (https://edithweutonga.co.za)氏[弊

団体代表吉田のイギリス大学院時代(音楽開発学)の同級生、また、2023 年度よりＪ IC A ジンバブエ支所広報大使として活動中]が立ち上げた団体としまなみアートファーム(以降 ＳＡＦＭ)が協力しジンバブエの課題を解決するため、日本で不要になった楽器を活用して女性音楽教師や音楽教師を目指す女子学生の地位向上を目指し、音楽技術を高める活動を始めた。

〈これまでの活動成果〉
【量的成果】
・楽器(鍵盤ハーモニカ)76 台提供
・ジンバブエ現地研修 15 回、総数 48 名 ・ビデオ課題提出へのフィードバック 50 件実施 ・指導者へのオンライン研修 11 回(2023 年 3 月開始)
【質的成果】
・現地講師が自立して授業を運営することができるようになる
・支援する学校側における、楽器指導への理解と価値の認識向上
〈活動による成果物〉
・指導マニュアル作成(音楽教師志望学生への指導者向け)

〈課題〉
課題①：2022 年から始めた本事業の修了生が第 1 期生８名と少ないため、小中学校の授業で楽器演奏を取り入れた西洋音楽教育の全国普及が難しい。今後、この事業を継続することで普及できる人材を輩出する必要がある。

課題②：通常の音楽指導はカウンターパートのみで行えるが、修了試験の運営や修了式典やコンサートなどに関しては、評価基準の統一や技能レベル確認のため、日本側の関与が必要である。採点基準の共有と評価者育成が今後の課題となる。

課題③：受講者は、音楽教師を目指す音楽科の学生であっても、西洋楽器の演奏経験がないものがほとんどで、家事や育児、仕事に追われて時間が十分に取れないこともあり、習得に時間がかかる。楽器演奏は、早期開始がより効果的である。また MSU は男子学生が多いため、ここで鍵盤ハーモニカを授業に取入れても受講生の６割が男子学生となってしまう。

②活動の目標：
以上の課題を解決していくため、次の目標で事業を行う

1. 現在開始している３名と 5 月から開始予定の 5 名の計 8 名を第 2 期研修生として教育
2. カウンターパートが自立して研修から修了試験や修了式の運営を行えるための体制構築
3. 音楽教師として自立して授業ができるような基礎的な西洋音楽の知識と演奏能力を有した人材を長期的に育成するために、早期に楽器教育を始めるため女子高音楽科（卒業後は多くの学生が Teachers College へ進学）での教育支援を開始する

２．業務実施結果

- 実施した内容

１）目標①に関する実施内容

現在開始している 3 名と 2024 年 5 月から開始予定の 5 名、計 8 名を第 2 期研修生として教育する

- 2024 年 5 月より、MCAZ にて第 2 期研修生 5 名の育成を開始した。現地講師による教本を用いた指導を通じ、受講生は練習や譜読みの過程でつまずく場面もあったが、粘り強く取り組み、うち 4 名が 2025 年 5 月に修了した。
- 2024 年 9 月、MGH へ鍵盤ハーモニカ 20 台と教材を寄贈し、20 名の女子生徒を対象に週 1 回の授業を開始した。国歌や民謡、ポップスなどを教材に用いたことで、生徒の興味関心が高まり、授業参加率が向上した。
- 2025 年 9 月、教材 35 冊および鍵盤ハーモニカ 64 台を寄贈した。これらは停電時にも使用できる教育ツールとして評価されている。また、教材は、今後ジンバブエの教育現場に適したカリキュラムづくりの参考資料としても活用する見込みである。

（２）目標②に関する実施内容

カウンターパートが自立して研修・修了試験・修了式を運営できる体制を構築する

- 第 1 期修了生である現地講師 2 名が、MCAZ において修了試験を自立して実施した。試験問題の作成・採点・記録作成までを現地で完結できるようになり、日本側は監修と確認を行う立場へ移行した。
- MGH では日本側代表（吉田）が現地講師および音楽教師とともに試験を共同で実施した。試験に続き、MCAZ との合同修了式およびコンサートを開催し、問題なく運営が行われていることを確認した。
- 教材・採点表・評価資料を Google Drive 上で共有し、現地講師が継続して運営できるよう、オンラインでのデータ管理体制整備を支援した。

（３）目標③に関する実施内容

女子高で早期楽器教育を開始し、教職を目指す学生の基礎演奏力と音楽教育力を育成する

- MGH において鍵盤ハーモニカ授業を開始し、これまで楽器演奏の機会がなかった女子生徒に実技指導の場を確立した。この取り組みにより、教職志望の女子学生が早期に基礎演奏力を身につける環境が整いつつある。
- MGH の音楽科卒業生の多くは Teachers College に進学することから、授業を通じて将来の音楽教師候補の育成につながる教育基盤を形成した。
- Harare Girls High School（HGH）においても新規導入を検討しており、学校側と協議を進め、2026 年 1 月からの授業開始を目指し準備を進行中である。

（４）その他、目標に記載はないが関連性の高い実施内容

連携・広報活動など、事業推進に寄与した取り組み

- Midlands State University（MSU）への協力隊派遣や、Community Capacity Building Initiative Center for Africa（CCBICA）との連携強化を行った。これらの協力体制により、音楽教育にとどまらず、女性の能力強化や地域全体の発展につながる社会的波及効果を高める基盤が整いつつある。
- 国内においては、活動報告会の開催、SNS による情報発信、クラウドファンディング等を実施し、広く支援者を募りながら本事業の認知拡大と支援基盤の強化に取り組んだ。

２）実施成果

（１）目標①に関する成果

「第 2 期研修生の育成（計 18 名）」

- 2024 年 5 月に開始した MCAZ での第 2 期研修生育成において、5 名中 4 名が 2025 年 5 月に修了。
- 鍵盤ハーモニカの基礎的な演奏技術、リズム理解、楽譜の読解などが可能となり、今後、指導補助に関わる人材として期待される。
- MGH では鍵盤ハーモニカ授業を開始し、20 名の女子生徒が週 1 回の授業に継続的に参加、内 14 名が 2025 年 9 月に修了した。国歌や民謡など身近な曲の演奏を通じ、授業参加率と学習意欲が向上した。
- 2025 年 9 月渡航時に、教材 35 冊、鍵盤ハーモニカ計 64 台を寄贈し、停電の影響を受けずに実技教育が継続可能な環境を整備した。

（２）目標②に関する成果

「現地主導の研修・修了試験・修了式の運営体制の構築」

- 第 1 期修了生の現地講師 2 名が、MCAZ での修了試験を自立実施。採点・記録・評価書作成まで現地完結が可能となり、日本側は監修体制へと移行。
- MGH では日本側と現地講師が共同で試験を行い、MCAZ との合同修了式・コンサートも現地中心で運営。指導・評価の水準が安定しつつあることを確認した。
- 評価書式や教材は Google Drive に共有し、データ管理と作業分担が可能となったことで、継続運営の基盤が強化された。

（３）目標③に関する成果

「女子高での早期楽器教育の導入準備・実施」

- MGH では、これまで楽器演奏の経験がなかった女子学生が鍵盤ハーモニカ授業に参加できるようになった。
- MGH の音楽科卒業生は多くが Teachers College へ進学することから、今後の音楽教師育成のための基盤を形成。実技スキルの早期育成が進みつつある。
- Harare Girls High School（HGH）との協議を進め、2026 年 1 月の新学期から授業導

入を目指して準備中。

（４）その他（目標外だが成果に寄与した事項）

「連携強化・広報活動の推進」

- Midlands State University（MSU）では協力隊員受け入れにより音楽教育体制が強化され、現地講師との協働可能性が拡大。
- 地域団体 CCBICA との連携を通じ、教育支援にとどまらず、女性の自立支援や地域開発にも波及する連携関係の基盤が整いつつある。
- 国内では活動報告会（年 2 回）や SNS 発信、クラウドファンディングなどを実施し、事業認知の拡大と支援基盤の強化に寄与。市民参加型支援の広がりにもつながった。

（３）得られた教訓・知見

1. **女子高での継続的な授業の定着による実技教育の拡充**

　現地の音楽教師の多くは西洋楽器の演奏経験がなく、新しい実技教育を定着させることは容易ではなかった。しかし授業を継続的に実施する中で、生徒の意識や学習姿勢に変化が見られ、一部の生徒は顕著な成長を示した。

こうした変化を支えた要因として、①停電時でも授業が成立する鍵盤ハーモニカを寄贈し、実技指導を可能にしたこと、②女子校と継続的に協働し、楽器演奏の重要性を学校側と共有できたこと、③教材提供と授業支援を通じて教員側の授業運営を支援したことがあげられる。

今後は、この「環境整備と関係構築をセットで進めること」が、地域における音楽教育を長期的に根付かせる鍵になると考えられる。

2. **現地女性講師の育成**

　現在の現地講師 2 名は男性であるので、ジェンダーバランスを図るためにも女子の現地講師を育成したい。MCAZ の修了者の中には、既に学校で勤務を始めている者や、教育現場での就業を希望している者もいる。しかし、鍵盤ハーモニカの演奏技術を身につけただけでは、授業を円滑に運営できる音楽教師としての実践力を十分に備えているとは言えない。今後は、現地講師のアシスタントとして授業を見学したり、生徒指導をサポートしたりする機会を設けることで、現場経験を積ませ、将来的にプログラムの正式な講師として活動できるよう段階的に育成していく必要がある。

3. **現地指導者への段階的権限移譲の重要性**

　日本側が段階的に運営権限を委譲したことにより、現地講師の自立的運営能力が着実に向上した。教材や評価資料の共有・データ化（Google Drive の活用）がその大きな要因となり、現地が主体的に計画・実施・評価を行う基盤づくりが進んだ。

4. **文化的適応と教育的効果の両立**

　ジンバブエでは教会活動を中心とした「合唱を基盤とする音楽文化」が強く根付いている。そのため、既に親しみのある曲を演奏することから始め、徐々に楽譜の読み方や音楽理論の理解へとつなげていく方法が効果的であることが確認された。授業に

国歌、ジンバブエ民謡、ポップスなどを取り入れたことは、生徒の学習意欲を大きく高める結果となった。今後も、現地文化への理解を基盤とした教材開発が成功の鍵となる。

5. **国際協力における継続的対話の価値**

関係団体や教育機関との対話を継続することで、信頼関係を維持し、課題発生時にも迅速かつ柔軟に対応することができた。単発的な支援ではなく、現地と並走しながら課題を共有・解決していく「伴走型の関係構築」が、結果として本事業の持続性と成果の質を高める要因となった。

（４）今後の活動・フォローアップの方針

1. **現地における継続的な授業運営の支援**

今後もMCAZおよびMGHにおいて、現地講師による授業運営が定着するよう支援を継続する。日本側は、教材の改訂やカリキュラム構成の助言を中心に行い、現地での自主運営を尊重する形で伴走的に支援していく。特に、指導力の差が生徒の学習成果に直結するため、現地講師同士の相互研修を通じたスキル共有の機会を設けることを検討している。

2. **HGHでのプログラム実施と拡充**

2026年度からの授業導入を正式に開始し、プログラムの初年度実施状況をモニタリングする。女子学生への早期音楽教育が継続的に機能するよう、教材提供・教員支援・授業設計の改善を段階的に行う予定である。また、将来的にはTeachers Collegeへの進学を見据え、音楽指導者を志す女子学生のキャリア形成を支援する仕組みづくりを進める。

3. **現地指導者の育成強化と第三期プログラムの実施**

2026年度から第3期プログラムとして、MCAZを拠点とし現地講師の指導能力向上を目的とした研修、鍵盤スキルの必要な合唱指導者や、スキルアップを目指す現役の音楽教師たちのため男女は問わずアダルトクラスを実施する。より多くの教育機関やコミュニティーで鍵盤ハーモニカを導入できるよう普及活動を支援する。

4. **持続可能な運営体制の確立と資金循環の構築**

2026年度以降は、受講料制を継続しつつ、授業料の一部を教材費や修了式運営費に充当できるよう運用改善を進める。学校側に対しては、インセンティブ支給を開始し、教育現場のモチベーション維持を図る。また、必要に応じて日本からの教材寄贈や民間支援の連携も模索し、現地主導での資金循環モデルの確立を目指す。

5. **他地域・他教育機関への展開**

MSUやCCBICAとの連携を基盤として、地方都市や他教育機関への波及を視野に入れる。特に、地方の教育現場では鍵盤ハーモニカのような持ち運びも簡単な電気供給の安定しない場所でも使用できる楽器の需要が高いため、モデル事例として他校への導入を促進していく。

6. **日本国内での広報・支援基盤の強化**

JICA「世界の笑顔のために」プログラムを活用することで、これまでより多くの楽器をジンバブエへ届けられる可能性が生まれた。

これまでは、スタッフが預入荷物として持参する方法に限られていたため、年間約 50 台が上限であり、現地での関税負担などもあって寄贈量に制限があった。
来年度は、このプログラムの活用を視野に入れつつ、日本国内での寄贈受付体制を整え、段階的に楽器募集の広報を広げていく予定である。より多くの市民の協力を得ながら、必要とする子どもたちに楽器を届ける取り組みを強化していく。
　また、国内での活動報告会の開催、クラウドファンディングの活用、SNS や地域イベントでの発信を通じ、支援者・協力者との関係を強化していく。同時に、今治市や地域 NPO との協働を継続し、「地方発の国際協力モデル」としての社会的発信力を高め、成果を広く社会に還元していく。

３．その他(エピソード・感想・写真など)

（１）活動中のエピソード・感想など

2023 年に第 1 期生として参加した研修生の一人が、現在は現地講師として授業運営を担うまでに成長した。音楽への情熱と論理的な学びの姿勢を兼ね備えた彼の成長は、プロジェクトの成果を象徴するものであり、現地で優秀な人材が育ったことは大きな成果である。

また、MSU の音楽科に JICA 海外協力隊の声楽専攻の音楽隊員が赴任したことにより、合唱文化の根強いジンバブエで専門的音楽教育への期待の高さを実感した。今回の渡航では現地講師と音楽隊員の連携が生まれ、今後の交流発展が期待される。

さらに、CCBICA によるホームレス女性の自立支援事業の修了式に参加し、初めて修了証を手にして涙する女性たちの姿に教育の力を実感した。電気のない環境で鍵盤ハーモニカを使い指導するクワイア練習の現場も印象的で、音楽が地域社会の結束と希望を生み出していることを改めて感じた。

加えて、本事業をきっかけに、MCAZ が加盟する国際音楽ネットワーク Ethno.world（本部：ベルギー／世界 40 ヵ国で国際音楽キャンプ開催）との連携が生まれた。ジンバブエのカウンターパートからの紹介と信頼をもとに、アジア初となる技術・人材支援を受け、当団体の拠点である大三島にてワールドミュージックのための国際民謡音楽キャンプを開催することができた。音楽教育支援事業が、単なる開発協力にとどまらず、国際文化交流事業へと発展したことは大きな成果であり、今後の展開における重要な転機となった。

（２）活動の写真

(2024 年 11 月地方都市の学校視察時をセレモニーで国歌演奏)（2025 年 9 月、MGH での試験前最後の研修の様子）

（2025 年 9 月 MGH での最終試験時）　（2025 年 9 月 MCAZ で寄付する教材を現地講師と確認する）

（2025 年 9 月 MCAZ と MGH 合同修了式での記念撮影）　（2025 年 9 月第一期修了生でもある現地講師が指導するクワイアで電気供給のない中鍵盤ハーモニカを使っての練習風景）

（３）JICA 基金活用事業を実施したことで団体の成長につながった点・良かった点

本事業を通じて、当団体は国際協力活動における実践的な運営力と信頼関係構築の重要性を再確認することができた。特に、楽器や教材の寄贈だけでなく、現地講師の育成や教育現場との対話を継続的に行うことにより、「支援する側」と「支援される側」という関係を超えた協働的なパートナーシップを築くことができた点は、大きな成長である。

また、JICA 基金の活用により、現地での活動報告や修了式、教育関係者との打ち合わせなど、資金がなければ十分に実施できなかった部分に力を入れることができた。これにより、現地講師や教育機関との連携がより密接になり、プロジェクト全体の信頼性と透明性が大きく向上した。

さらに、事業の進行に伴い、現地パートナーや教育機関との情報共有を効率化するために、オンラインツール（Google Drive や WhatsApp など）を積極的に活用した。これにより、海外との距離的・時間的制約を超えて、日常的に現地と連絡・資料共有が可能となり、運営の継続性と即応性が向上した。

国内においても、活動報告会や写真展、SNS 発信などを通じて地域住民や支援者との交流が深まり、国際協力活動を「地域発の取り組み」として位置づける意識が高まった。これにより、地域社会の中で国際

協力を「身近なもの」として伝える基盤が整備されたことも大きな成果である。
　総じて、JICA 基金の支援は、単に活動資金の補填にとどまらず、当団体が中長期的な国際協力モデルを構築する上での学びと成長の機会となった。今後は、ジンバブエで育成された人材と協働しながら、ジンバブエ・日本・世界をつなぐ文化交流と人材育成の循環をさらに広げていきたい。
　その発展形として、今回の活動が契機となり、MCAZ を通じて国際音楽ネットワーク Ethno.world（世界 40 ヵ国で国際音楽キャンプを主催）との連携が生まれ、当団体の拠点である大三島でアジア初の国際音楽キャンプを開催することが可能となった。今後はこの国際キャンプを年次開催し、地域初の国際文化交流事業として「地域の国際化」「異文化理解の促進」「地域文化の発信」へと発展させていきたい。